

昔むかし、あるところに、王さまがいました。王さまは、海でも陸でも走る船があるという話を聞きました。王さまは、そんな船がほしくなりました。そこで、おふれを出しました。

「海でも陸でも走る船を造ったものには、王国の半分をあたえ、姫と結婚させよう」

たくさんの若者が挑戦しましたが、だれもそんな船を造ることができませんでした。

お城から少し離れた森の中に、三人の兄弟が住んでいました。一番上はペーター、二番目はポール、末っ子は灰まみれのブーツといました。三人は、王さまのおふれを聞いて、運試しをしようと思いました。

まず初めに、一番上のペーターが、船を造りに、森へ行くことになりました。ペーターはお母さんにお弁当を作ってもらってふくろに入れて、かついで出かけました。どんどん行くと、腰の曲がったみすばらしいおじいさんに会いました。

「どこへ行くんだね」と、おじいさんはききました。

「森だよ。父さんのために木のお皿を作りに行くんだ」と、ペーターは答えました。

「そうかい。じゃあ、木のお皿を作るがいいよ。ところで、おまえの背中のふくろには、何が入っているんだね」

「こやしだよ」

「そうかい、じゃあ、それはこやしだな」

おじいさんはそういつて、行つてしまいました。

ペーターは、森に着くと、木を切つて、船を造り始めました。けれども、いくらがんばつても、船にはならなくて、木のお皿がつぎつぎにできました。お昼になったので、ちよつと一口食べようと、ふくろを開きました。すると中には、お弁当はなくて、こやしばかりが入っていました。ペーターは、うんざりして、家に帰つて行きました。

今度は、ポールが出かけました。どんどん行くと、みすばらしいおじいさんに会いました。

「どこへ行くんだね」

「森だよ。ぶたのえさ入れを作りに行くんだ」

「そうかい。じゃあ、ぶたのえさ入れを作るがいいよ。ところで、おまえの背中のふくろには、何が入っているんだね」

「こやしだよ」

「そうかい、じゃあ、それはこやしだな」

おじいさんはそういつて、行つてしまいました。

ポールは、森に着くと、木を切つて、船を造り始めました。けれども、いくらがんばつても、ぶたのえさ入れがつぎからつぎにできました。お昼になったので、ふくろを開きました。すると中には、こやしばかりが入っていました。ポールは、うんざりして、家に帰つて行きました。

ブーツは、

「今度はぼくの番だ。お姫さまと結婚して、国の半分を手に入れるんだ。母さん、ぼくにもお弁当を作ってよ」といいました。お母さんは、

「おまえは、いつも炉ばたで灰まみれになっているのに、うまくいきっこないよ。あきらめな」といいました。けれども、ブーツは、ビスケットをふたと気の抜けたビールをふくろに入れて、出かけて行きました。

どんどん行くと、みすばらしいおじいさんに会いました。

「どこへ行くんだね」

「森だよ。海でも陸でも走る船を造りに行くんだ。お姫さまと結婚して、国の半分を手に入れようと思ってるね」

「そうかい。ところで、おまえの背中のかくろには、何が入っているんだね」

「お弁当だよ」

おじいさんは、

「もしお弁当を少し分けてくれたら、おまえを手伝ってやろう」といいました。

「わかった。でも、ビスケットふたと気の抜けたビールしかないんだよ」

「それでけっこう」

ふたりは森の中に入っていきました。大きな古いカシの木のところまで来ると、おじいさんはいいました。

「このカシの木をひとかけらだけ切って、それを地面に埋めるんだ。そして、そこに横になって眠っておいで」

ブーツは、カシの木を少し切って、かけらを地面に埋めました。それから、横になると、すぐに眠ってしまいました。ブーツは、夢の中で、木を切ったりけずったり、トンカチでたたいたりする音を聞いていました。おじいさんに起こされて目を覚ますと、カシの木のそばに、りっぱな船が出来上がっていました。

おじいさんは、

「さあ、海でも陸でも走る船だ。この船に乗って出かけるんだ。とちゅうでだれかに出会ったら、なかまにするといい」といいました。

「わかった。ありがとう」といって、ブーツは船に乗りこみました。

しばらく船を走らせていくと、丘の上で、たいへんやせた男が寝ころがって、岩をかじっていました。

「やあ、あんたは何者なんだ。岩なんかかじって」と、ブーツがきくと、男はいいました。

「いくら食べてもお腹がいっぱいにならないから、しかたがないので、岩をかじってるのさ。ほんとは、肉が食べたいんだけど。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、岩をいくつか持って、船に乗りこみ、なかまになりました。

船が少し進んでいくと、日当たりのいい土手に、男がひとり寝ころんで、たるのコル

クせんをしゃぶっていました。

「やあ、あんたは何者なんだ。コルクせんなんかしゃぶって」と、ブーツがきくと、男はいいました。

「わしは、お酒をいくら飲んでものどがかわいているんだ。しかたがないので、お酒のたるのせんをしゃぶっているのさ。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、コルクせんを持って、船に乗りこみ、なかまになりました。

船が少し進んでいくと、男がひとり、片足で跳びはねていました。もう一方の足には、鉄の重りを七つもつけていました。

「やあ、あんたは何者なんだ。どうして片足で跳びはねているの。もう一方の足には鉄の重りを七つもつけて」と、ブーツがきくと、男はいいました。

「わしは、体が羽のように軽いんだよ。もし両足を地面に下ろしたら、世界の果てまで五分で走って行ってしまうのさ。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、船に乗りこみました。

船が少し進んでいくと、男がひとり、片方の耳を地面につけて寝ころんでいました。

「やあ、あんたは何者なんだ。どうして耳を地面につけているの」

「草がのびる音を聞いているのさ。わしの耳はすごくよく聞こえるんだ。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、船に乗りこみました。

船が少し進んでいくと、男がひとり、鉄砲で何かをねらっていました。

「やあ、あんたは何者なんだ。何をねらっているんだい」

「世界の果てさ。わしの目はすごくよく見えるんだ。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、船に乗りこみました。

船が少し進んでいくと、男がひとり、のどを押さえて立っていました。

「やあ、あんたは何者なんだ。どうしてのどを押さえてそんな所に突っ立っているの」

「わしの体の中には、七つの夏と、十五の冬があるんだ。それがもし外へもれ出したら、あつというまに、世界じゅうがこおってしまうのさ。だから、のどを押さえているんだよ。ところで、わしも船に乗せてくれないか」

「いいとも」

男は、船に乗りこみました。

しばらく船を走らせていくと、王さまのお城に着きました。ブーツは中に入行って行って、王さまにいいました。

「海でも陸でも走る船を持ってきました。お姫さまと結婚させてください」

けれども、王さまは、ブーツが灰だらけでみすばらしいのを見て、お姫さまをこんな若者と結婚させたくないと思いました。そこで、こういいました。

「ちよつと待て。まず、お城の食べ物蔵にある三百たるの肉を、あしたの朝までに、ぜんぶ食べられたら、姫と結婚させてやろう」

「わかりました。でも、わたしのなかまの一人に手伝わせてもいいですか」

「よからう。六人みんなに手伝わせてもいいぞ」

王さまは、たとえ六百人に手伝わせたとしても、食べきれはるはずがないと思いました。

ブーツは、岩かじりの男を連れて食べ物蔵に入って行きました。そして、つぎの朝、蔵が開けられたときには、三百たるの肉がほとんど食べつくされていました。残っていたのは、なかまのための肉六切れだけでした。ブーツは、王さまの所に行つて、

「食べ物蔵はからっぽになりました。さあ、お姫さまと結婚させてください」といいました。

けれども、王さまは、やっぱりブーツとお姫さまを結婚させたくありませんでした。そこで、こんどはこういいました。

「ちよつと待て。その前に、お城の酒蔵にある、三百たるのビールと三百たるのワインを、あしたの朝までに、ぜんぶ飲みほせたら、姫と結婚させてやろう」

「わかりました。でも、わたしのなかまの一人に手伝わせてもいいですか」

「よからう」

王さまは、たとえ七人がかりでも、飲みほせるはずがないと思いました。

ブーツは、たるのせんしやぶりの男を連れて酒蔵に行きました。つぎの朝、蔵が開けられたときには、三百のたるのビールとワインがほとんど飲みつくされていました。残っていたのは、なかまのためのほんの六杯だけでした。ブーツは、王さまの所に行つて、

「酒蔵はからっぽになりました。さあ、お姫さまと結婚させてください」といいました。

王さまは、それでもブーツとお姫さまを結婚させたくありませんでした。そこで、こんどはこういいました。

「ちよつと待て。その前に、姫のお茶のために、世界の果ての井戸から、水をくんでくるのだ。十分以内で取って来られたら、姫と結婚させてやろう」

ブーツは、片足跳びの男にいいました。

「世界の果ての井戸から、お姫さまのお茶を入れるための水をくんでくれないか。十分以内でね」

片足跳びの男は、手おけをつかむと、片方の足に付けていた七つの重りをはずして、二本足で走りだしました。男はあつというまに見えなくなりました。ところが、なかなかどつて来ません。あと三分になったとき、ブーツは聞き耳の男を大声でよびました。

「あいつに何が起こったのか、聞いてくれないか」

聞き耳の男は、地面に耳をつけていいました。

「片足跳びのやつ、井戸のそばでいびきをかいて寝ているぞ。トロルたちが、あいつの髪をとかして寝かしつけているんだ」

ブーツは、すぐに、鉄砲撃ちの男にいいました。

「トロルに弾を撃ちこんでやれ」

鉄砲撃ちは、すぐさま、いっぴきのトロルの目玉を撃ちぬきました。トロルのさけび声で、片足跳びの男が目覚ましてとび起きました。そして、井戸の水をくむと走りに走りました。もどつて来たとき、まだあと一分ありました。

ブーツは、王さまの所に水を持って行つて、

「さあ、お姫さまと結婚させてください」といいました。

けれども、王さまは、いいました。

「トウモロコシを乾かす蒸し小屋に、たぎぎの山が三百ある。おまえが蒸し小屋に入つて、たぎぎをぜんぶ燃やしきるまでがまんできたら、姫と結婚させよう」

「わかりました。でも、わたしのなかまの一人に手伝わせてもいいですか」

「よからう」

ブーツは、体の中に七つの夏と十五の冬を持っている男を連れて、蒸し小屋に入りました。王さまは、小屋の下から火をどんどんたきつけました。小屋の中はストーブでもとけそうなほどに熱くなりました。

ブーツは、男に、

「冬を六つか七つ出してくれないか」といいました。たちまち、小屋の中は、ちょうどいい暖かさになりました。でも、夜になると寒くなってきたので、こんどは夏をふたつ出して、ふたりはぐっすり眠りました。

夜が明けると、小屋の外に王さまがやって来ました。王さまは、ブーツが燃えかすになつているだろうと思つて、戸を開けました。すると、ブーツは寒くてふるえているではありませんか。夏と冬を持った男は、王さまの顔に向かって、最後の冬を吹きつけました。王さまは、顔にひどいしもやけができてしまいました。

「さあ、お姫さまと結婚させてください」と、ブーツはいいました。

「わかった、わかった。姫も国の半分も、おまえの好きにするといい」と、王さまはいいました。

それから、結婚式の大宴会が行われました。国じゅうが大よろこびでした。

みんなは、魔女をやつつけるとさびながら、お祝いの大砲をうちました。そのうち、大砲につめる物がなくなつたので、みんなは、わたしにびん入りのおかゆとざる入りのミルクを持たせて大砲につめてうちました。それで、わたしは、ここまで飛ばされて、このお話を語っているのですよ。

原話：『Tales from the Field』Peter Christen Asbjornsen

再話：村上郁